

要注目！ 小川糸の『ライオンのおやつ』

図書館係 阿部健治

今、BSNHKで毎週日曜日の夜 10 時から『**ライオンのおやつ**』というドラマが放映されている（全8回で7月11日が第3回だった）。このドラマ枠は見応えのあるものが多く（以前紹介した**伊吹有喜**の『**カンパニー**』もこの枠だった）、今回はちょっと気になっていた小川糸原作の作品だったので、録画して丁寧に見ている。

ドラマを見ながら、原作も読み始め、同時に小川糸の原点とも言える『**食堂かたつむり**』も読み（先行して読み、読了した。）、さらに平行して『**ツバキ文具店**』（これも代表作の一つらしいので）も読んでいるところだ。小川糸は 2017 に『ツバキ文具店』、2018 にその続編である『**キラキラ共和国**』が本屋大賞にノミネート（それぞれ4位・10位だった）され、1年おいた 2019 にはこの『ライオンのおやつ』が本屋大賞で第2位に輝いた。

このように躍進著しかったのに、なぜ今まで読まなかったのか。自分でも不思議なのだが、つらつら考えてみると、それは次の2点に収斂されるようだ。

①小川糸と言う名前が、第1回本屋大賞（『**博士の愛した数式**』2004）の**小川洋子**と似ていたということ。

作品の内容とは全く関係ないはずなのに、よく知る作家と名前が似ていると戸惑うことはけっこうある。本屋大賞の常連に**柚木麻子**という人（『**本屋さんのダイアナ**』『**ランチのアッコちゃん**』で本屋大賞ノミネート、『**ナイルパーチの女子会**』で高校生直木賞を受賞。『**ナイルパーチの女子会**』は今年、BS テレビ東京土曜ドラマ、水川あさみ主演で放映）がいたが、その後、**柚月裕子**という作家（『**盤上の向日葵**』で 2018 本屋大賞第2位。この作品も千葉雄大主演、BSNHK日曜10時枠でドラマ化）が出現して、筆者は大いに混乱したのだった。

②『食堂かたつむり』『ツバキ文具店』『キラキラ共和国』『ライオンのおやつ』等の題名から、文章は達者だろうが、結局は（ありきたりの）「ほのぼの、心温まる系」の作家ではないか、と思い込んでしまったこと。

イメージとしては、キャラクターさえ決まってしまうえば、いくらでも話は書ける（『サザエさん』みたいな）というタイプの作品かと思ってしまったのだ。しかし、これは全く外れていた。むしろ、小川糸の作品は、**一作一作に込められたエネルギーが桁違いに大きい**のだ。

『ライオンのおやつ』は、主人公の海野雫（しずく）が 30 代前半で治癒不能の病に冒され、瀬戸内海の島にあるホスピス「ライオンの家」に入るという話である。「ライオンの家」では、日曜日に入所者の誰かの思い出のおやつを食べる

催しがあるのだが、これが題名の由来になっている。この設定は、どの作品でも「食べることは生きることだ」と感じさせてくれる小川糸ならではのものだが、流石に目の付け所が違うと感心させられた。もともと「おやつ」とは、三度の食事とは目的が異なる、特別なものだ。だから、この催しは、このホスピスに入っている誰かの、今まで生きてきた中での**最も特別な経験**を、**味覚（いや、実は嗅覚や視覚も含めた総合的なものだ）**を通して、一同が**共有する**という時間なのである。そこにいるのは、全て死を意識している人たちである。日曜が来るごとに他者の特別な経験を共有し続け、いずれ自分の番が巡ってきて自分の特別な経験をそこにいる全ての人たちが知ってくれることになる。死を間近にする者たちにとって、これ以上貴重な時間などあるだろうか。

日本においては、医療の対象は治癒の見込みのある者だけで、治癒不能となった瞬間にその対象外にはじき出される。それを救おうとするのがホスピスだが、そういう場所でも、ここまで死にゆく人たちへのリスペクトが存在しているか、甚だ心許ない気がする。この本を読んで、「**人の尊厳を守る**」とはこういうことなのだな、と本当に感心させられた。

ドラマ『ライオンのおやつ』の方は岡田恵和（おかだよしかず）という人（最近のドラマでは『姉ちゃんの恋人』『にじいろカルテ』がよかった。「人と人の絆」に焦点を絞り、それを思いがけない形で映像化する人だ）が脚本を手がけている。登場人物（とそのキャラクター）は原作と変わらないが、そこで起こる事件は微妙に変えている。今、原作を読みながら見ているのだが、この違いにそれぞれの意図が窺えて面白い。ドラマと本の両方を同時平行的に鑑賞するのは案外難しい（だいたい本の方が先に出るので、ドラマが放映される時には本の細部を忘れてしまっていることが多い）ことで、その意味でも今回は特別な（「儲けもの」というような）感じがある。

主人公の海野雫を演じているのは土村芳（つちむらかほ）という女優さんで、朝ドラなどにも出ていたらしいが、筆者は初めて見た。ちょっとした表情の変化で内心を表現したりするシーンが多く、難しい役だと思うが、自然で素直な感じがしてとてもいいと思う。「ライオンの家」を主宰するマドンナ（かなりの年配なのにいつもメイド服を着ている）役の鈴木京香は言うまでもなく素晴らしい。こういう人に看取られて死んでゆけるなら恐怖も少しは軽減するだろうな、と心からそう思った。もう3回放送されてしまっているが、設定はわかりやすいので、途中からでも無理なく入っていけると思う。絶対見た方がいい、と取りあえずお勧めしておく。

原作の方では、雫の心の移りゆきが細やかに濃密に（古典語の「こまやかなり」は「濃やかなり」と書き、「細やかだ」の他に「濃い」という意味がある。実は両者は同義なのだ）描かれる。こういうところはドラマで描くのはたいへん難しく、文章という形式だからこそより良く描けるのだ。

死（死ぬまでは生きているので必然的に「生」もだが）とは自然のプロセスであるから、自分でその時を決めることはできず、私たちは静かにその訪れを待つしかないという小川糸の哲学も、書物だからこそ、（ドラマよりも）より深く伝わってくる。こういうことが心に響いてくるのが読書の喜びだと思う。足女生にも是非この喜びを味わってほしいと願っている。